

上浦遺跡発掘調査報告書

1992

新津市教育委員会

例 言

- 1 本書は、新潟県新津市大字福島字上浦271番地他に所在する上浦（かみうら）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、かんがい排水事業に伴い、平成3年12月2日～12月7日（試掘調査）、平成3年12月24日～平成4年1月20日（本調査）に新津市教育委員会が主体となって実施した。調査に要した経費は、農政部局が75%、文化財保護部局が25%を負担し、文化財担当部局については、国庫及び県費の補助金交付を受けた。
- 3 出土遺物・調査記録は、新津市教育委員会で一括して保管している。遺物の注記は、「上浦」としてある。
- 4 遺物実測図で須恵器・珠洲は黒塗り、土師器は白抜きとした。また、小破片で復元が困難なものについては、中心線と左右の図の線を離してある。
- 5 写真撮影、図版作成及び本書の執筆は作業員の協力を得て、渡邊が行った。
- 6 調査から、本報告書の作成に至るまで多くの方々・機関からご指導・ご助言を得た。

目 次

I	発掘調査に至る経緯	1
II	遺跡の位置と周辺環境	2
	1 位置と周辺環境	
	2 周辺の遺跡	
III	調査の方法	4
	1 確認調査の方法	
	2 発掘調査の方法	
IV	調査の結果	6
	1 層序	
	2 遺構	
	3 遺物	
V	まとめ	12

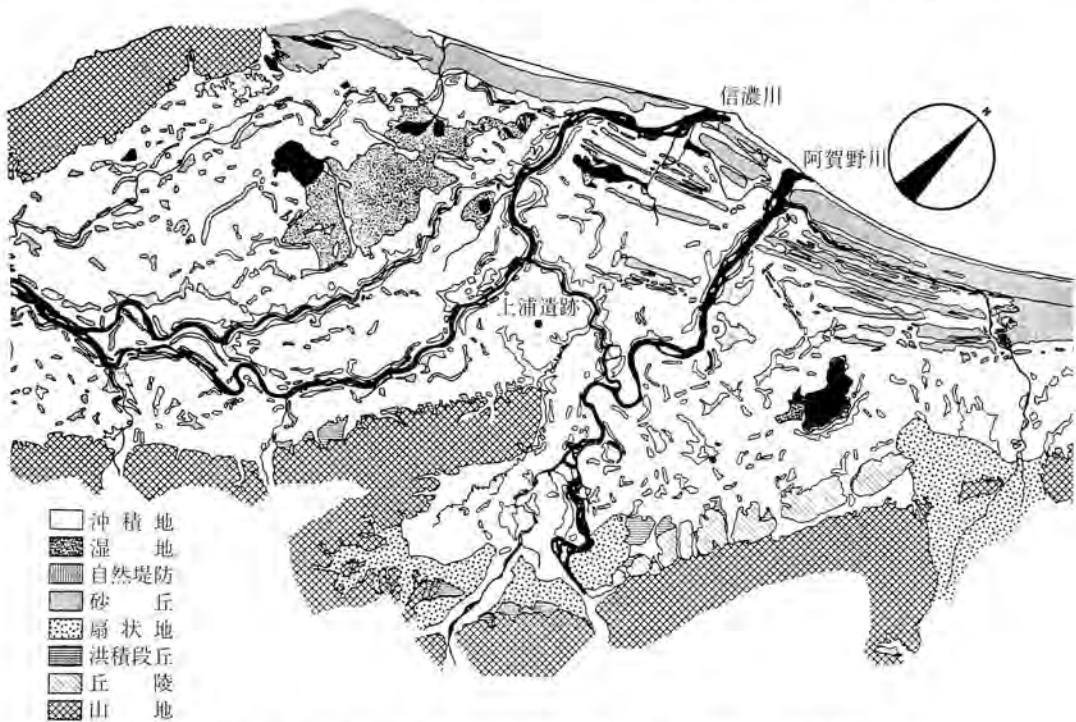
I 発掘調査に至る経緯

新津市内では、昭和50年から県営かんがい排水事業が実施されてきたが、沖積平野に立地する遺跡は範囲が不明確な遺跡が多いため、埋蔵文化財の取扱いについて協議されることはほとんどなかった。ところが平成2年になり、市域内で磐越自動車道建設に伴い新潟県教育委員会による上浦遺跡等の発掘調査が始まり、平野部の遺跡があらためて再認識された。そのような中で、平成2年度には、かんがい排水事業に伴い、長沼遺跡の発掘調査を実施し、8世紀初頭の貴重な遺跡であることが明らかとなった。

平成3年度も、かんがい排水事業を県営事業として実施する予定であったが、国道403号線と新津市工業団地建設予定地に挟まれた区域については補助事業として実施すると、農地転用等の手続きで困難を伴うため、新津市の単独事業として実施することになった。開発側は工業団地事務を取り扱っている商工観光課が窓口となった。

開発範囲は、周知の遺跡範囲には該当しないが、県教育委員会が磐越自動車関係で発掘調査を実施した上浦遺跡の南に隣接するため、まず新津市教育委員会が調査主体となり、試掘調査を実施し、その結果に基づいて再び遺跡の取扱いについて協議することとなった。

これをうけて、新津市教育委員会は、12月2日～7日の6日間にかけて、試掘調査を実施した。この結果、現地表下25～75cmほどの深さに、北東から南西方向に幅100～200m、長さ1kmにわたって広がっている平安時代の遺跡であることが明らかとなった。この結果を基に、その取扱いについて協議を行い、地元の要望を受け入れて、発掘調査は工事と併行して行い、掘削した部分について



第1図 新津市とその周辺の地形 (新潟県編 1986 一部改変)

はその日のうちに工事施工業者がかんがい用パイプを付設して埋め戻すこと、調査範囲はあくまで、工事断面に合わせ、上幅1m・下幅0.5m・深度1mとすることが決まった。また、発掘調査は新津市教育委員会が主体となって実施し、経費は文化庁と農林省の覚え書きに基づく割合で、それぞれの担当部局が負担することで合意した。

新津市教育委員会は、文化財保護法第98条の2の規定に基づく発掘調査の通知を行い、平成3年12月24日から平成4年1月20日にわたり発掘調査を実施した。発掘調査日数は9日、協議に基づく発掘調査対象面積は、総延長800m×上幅1m=800㎡である。

II 遺跡の位置と周辺的环境

1 位置と周辺的环境 (第1図)

新津市は、新潟県のほぼ中央、新津丘陵の北端に位置し、市域の大半は平坦な沖積平野と起伏の小さな丘陵からなっている。市域の西を信濃川、東を阿賀野川が流れ、北は両河川をつなぐ小阿賀野川を挟んで、県都新潟市と境を接している。また新津丘陵の東縁には、能代川が南東から北西に貫流するが、河川改修以前は川幅が狭く、流下能力も小さいため、度々洪水を繰り返してきた。現在、平野部は自然堤防などの微高地が居住域となっているほかは、圃場整備が進み、水田が一面に広がる土壌豊かな穀倉地帯となっている。

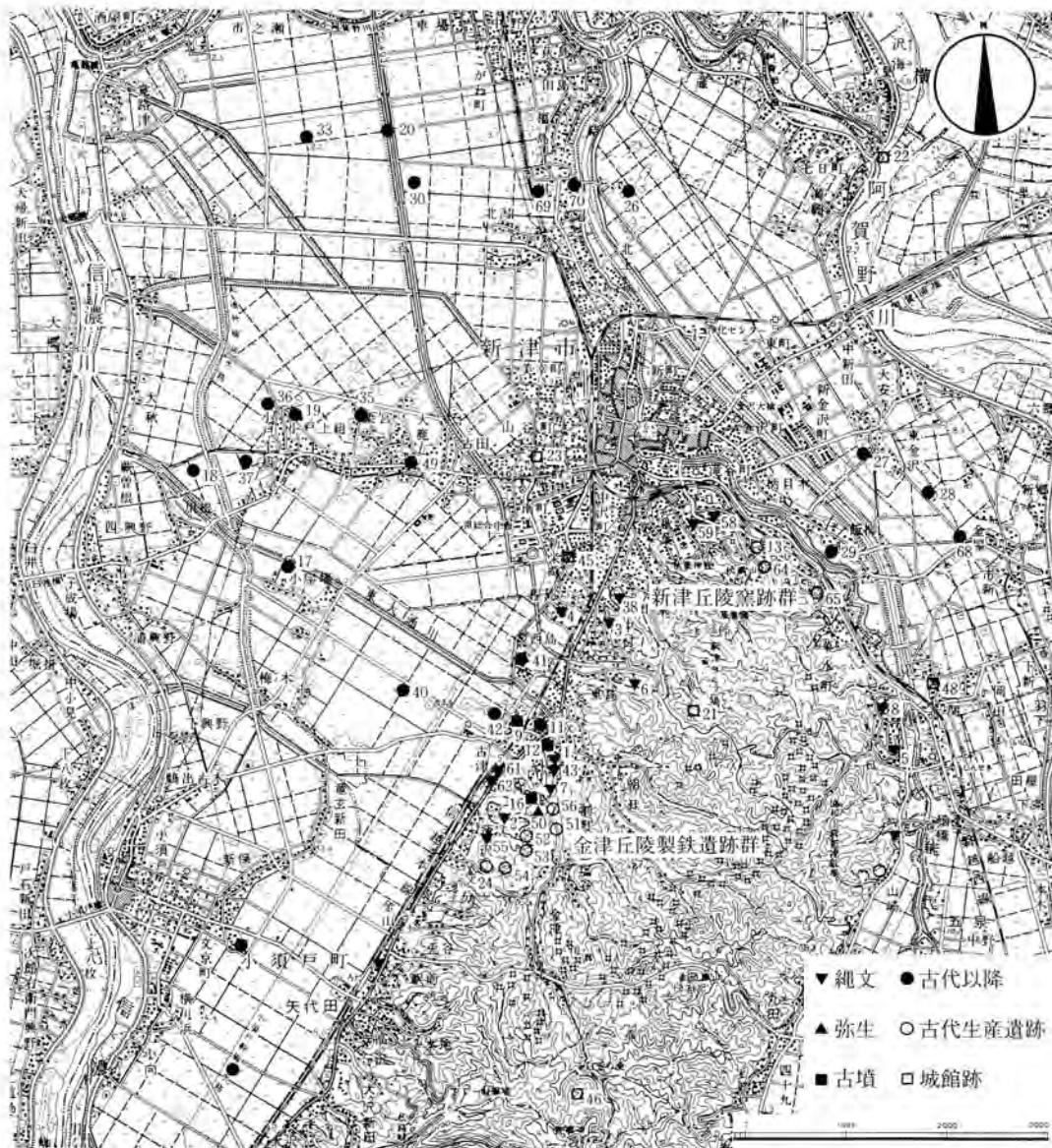
平野部の微高地・自然堤防には、①新津市街地から西方の小合まで続くもの、②新津市街地から北西方向の長割・覚路津までほぼ連続するもの、③能代川左岸で新津市街地から北上・川口・福島・田島へと続くもの、④満願寺から結の東方へと断続的に追えるものなどがある。市史によれば、これらは阿賀野川の河川堆積によってできた自然堤防と考えられており、阿賀野川の河道は現信濃川寄りの地域に存在し、その後流路を徐々に東へと転移させていったと推測されている。古代の遺跡の多くがこのような微高地に立地している。

上浦遺跡は、信濃川・阿賀野川・小阿賀野川に挟まれた沖積平野に立地し、付近の標高は2.9mを測る。周囲は一部の畑地を除くと、水田が広がっている。今年度調査地点の西には国道403号線が南北に通る、北は近年、磐越自動車道が東西に通ることになり、平成2・3年にかけて新潟県教育委員会が発掘調査を行った。

北潟から北西方向の覚路津にかけて、上浦遺跡のほかにも川口甲遺跡(69)・長沼遺跡(33)・結遺跡(20)などが存在する。前述の①・②の自然堤防の中間に位置することから類推して、現在では河川堆積や洪水によってほとんど認めることができないが、埋没した自然堤防や後背湿地上に遺跡は立地したものと考えられる。

2 周辺の遺跡 (第2図)

市内の遺跡分布をみると、縄文・弥生時代の遺跡や古代の生産遺跡は丘陵上や丘陵裾部に立地し、古代以降の遺跡は沖積平野の微高地に多く立地する傾向がある。舟戸遺跡(9)など古墳時代中期から後期になると丘陵の縁辺から平野部にかけて立地する遺跡が出現し、結遺跡(20)・長沼遺跡



No	遺跡名	時 代	No	遺跡名	時 代	No	遺跡名	時 代
1	高矢A	縄文中期～後期	23	新津城跡	南北朝～戦国	49	諏訪神社石仏	中世
2	鳥撃堀	縄文	24	居村A	奈良～平安	50	八幡山	弥生中期～後期・平安
3	原	縄文中期～後期	26	神ノ羽	古墳中期・奈良～平安・中世	51	古津初越A	古代
4	山崎	縄文後期	27	西江浦	平安	52	大入	奈良～平安
5	手	縄文中期～後期	28	寺道上	平安	53	居村C	奈良～平安
6	平林	縄文後期?	29	瓜池の塚	奈良～平安・中世?	54	居村B	奈良～平安
7	埋骨地	縄文中期～後期・弥生後期～古墳前期	30	上浦	奈良～平安・中世	55	神田	縄文・古代
8	厨平	縄文	33	長沼	奈良～平安・中世	56	古津初越B	古代
9	倉口	古墳中期・奈良～平安	35	浄楽	中世	58	小千平	縄文後期
11	塚平	奈良～平安	36	西沼	古代	59	秋葉	縄文後期
12	高矢C	古墳中期	37	長佐ニ門沼	古代	61	二百刈	縄文・古代?
13	七本松堂跡群	奈良～平安	38	城見山	縄文・古代?・中世?	62	下谷池	縄文
16	古津八幡山古墳	古墳前期・南北朝?	40	中郷	古代	64	滝谷渡跡	奈良～平安
17	下堀ノ木	奈良～平安・中世?	41	桜大門	古代	65	草木堂	奈良～平安
18	田根	奈良～平安	42	北郷	古代?	68	細池	奈良～平安
19	小千下組	奈良～平安・中世?	43	高矢B	縄文	69	川口甲	平安
20	結	古墳後期～奈良	45	程島館	戦国?	70	江内	中世～江戸
21	東島城跡	戦国	46	金津城	南北朝?			
22	長崎城跡		48	大間部				

第2図 新津市周辺の主要遺跡 (国土地理院 1991 新津 1 : 50,000を縮小)

(33)など奈良時代初頭になると、沖積平野上の微高地に遺跡が進出するようになるものと思われる。

一方、丘陵上に立地する古代の生産遺跡をみると、新津丘陵東斜面では須恵器窯跡が分布し、丘陵西斜面の金津地区（通称金津丘陵）では、大規模な製鉄遺跡群が存在する。新津丘陵北東端にある七本松窯跡（13）から山崎窯跡（五泉市 No. 12）にかけての範囲には最近の市史編纂事業によってさらに数か所の窯跡の存在が明らかになっている。時期的には山崎窯跡が山三賀Ⅱ期後半（8世紀第2四半期から第3四半期）、七本松窯跡が山三賀Ⅱ～Ⅲ期（8世紀第2四半期から9世紀第1四半期）に比定されている。金津丘陵の製鉄遺跡群は昭和62・63年度に実施した確認調査で、7遺跡9地点にわたる規模の大きな製鉄遺跡群であることが判明した。その後、平成元年度から平成3年度にかけて継続して行った発掘調査により、8世紀から9世紀にかけての製錬炉（堅型炉・箱型炉）や多数の木炭窯が検出されている。

III 調査の方法

1 確認調査の方法（第3図）

前年度実施した長沼遺跡の確認調査時には、地元地権者に十分な説明をせずに実施し、調査終了後に数々の問題点が生じたため、今年度は発掘調査をする前に、地元で説明会を開き協力を求めるとともに、地権者の要望もできるだけ受け入れるよう努力した。その結果、トレンチ位置は事前に設定し、各地権者から承諾書をもらう手続きを取った。また、トレンチの規模・深度も工事の掘削幅・掘削深度にあわせ、1×2m程度、深さ1mとした。このため地山に達しないトレンチもあり遺跡範囲の確定には問題を生じることになった。畦畔沿いはトラクターや田植え機がよく施回する場所なので避け、中央部分にした。トレンチは掘削し、そのまま放置すると湧水がたまるため、記録を取った後、すぐに埋め戻すことにした。

調査は、バックホー1台・調査員2名・作業員3～4名体制で実施した。開発区域内に任意に設定したトレンチをバックホーで地表から地山まで徐々に掘り下げていきながら、遺構・遺物の有無を確認し、地山まで達した段階で人力で精査をし、遺構略測図・土層柱状図を作成し、写真撮影を行った。結果的には調査対象面積6,225m²内に70か所（約140m²）のトレンチを設定し、そのうち11か所のトレンチで遺構・遺物が検出された。

2 発掘調査の方法（第3図）

事前の確認調査の結果に基づき推定した遺跡範囲内において、工事と併行して発掘調査を行った。掘削幅は工事断面に合わせ、上幅1m・下幅0.5m・深度1mとしたため、場所によっては地山に達していないところもある。

調査はグリッド法により、グリッドは遺跡の広がる可能性を考慮して、50×50mの大グリッドを基準として、全域をカバーするよう設定した。記号は東西方向に算用数字、南北方向にアルファベットを付した。また各大グリッドは5×5mに分け、北西隅から南東隅へ1～100の小グリッドとし、O51-1などと呼称することとした。グリッドの方向は農道に合わせ、O51グリッドの北西端を基



第3図 調査区設定図 (新津市全図 1987 S=1:10,000)

準に方眼を設定した。実際には調査範囲が広範囲なわりに面積が狭いため測量杭は打設せず、2,000分の1の計画図に50m方眼を書き入れ、現地ではその図面に合わせて50m間隔にポールを立てて杭の代わりとした。小グリッドはポールの間に5m間隔でピンポールを立てて境界とした。計測にはメジャーを用いたため図面と合わなくなるのではないかと心配したが、結果的には図面と現況で大きな違いもなく、特に問題は生じなかった。現況はほとんど水平なのでレベルは用いず、地表を基準としたため、海拔標高は計測していない。

調査は工事と併行して実施し、調査終了後すぐに工事施工業者がかんがい用パイプを付設し、埋め戻しを行った。調査は、バックホーで地山まで徐々に掘り下げていきながら、遺構・遺物の有無を確認する方法をとったが、遺構等が検出された場合も下幅50cmと非常に狭く、その性格が判然としない場合が多かった。時間的制約もあり、遺構の図面は略図で済ませた。基本的には上記の方法を取ったが、確認調査で遺物の分布密度が低いと判断された場所は工事立ち会いに近い形を取り、バックホーで掘削した土砂に遺物が含まれていないかを調べ、遺物が検出された場合には小グリッドで取り上げた。

IV 調査の結果

1 層序 (第4図・図版4)

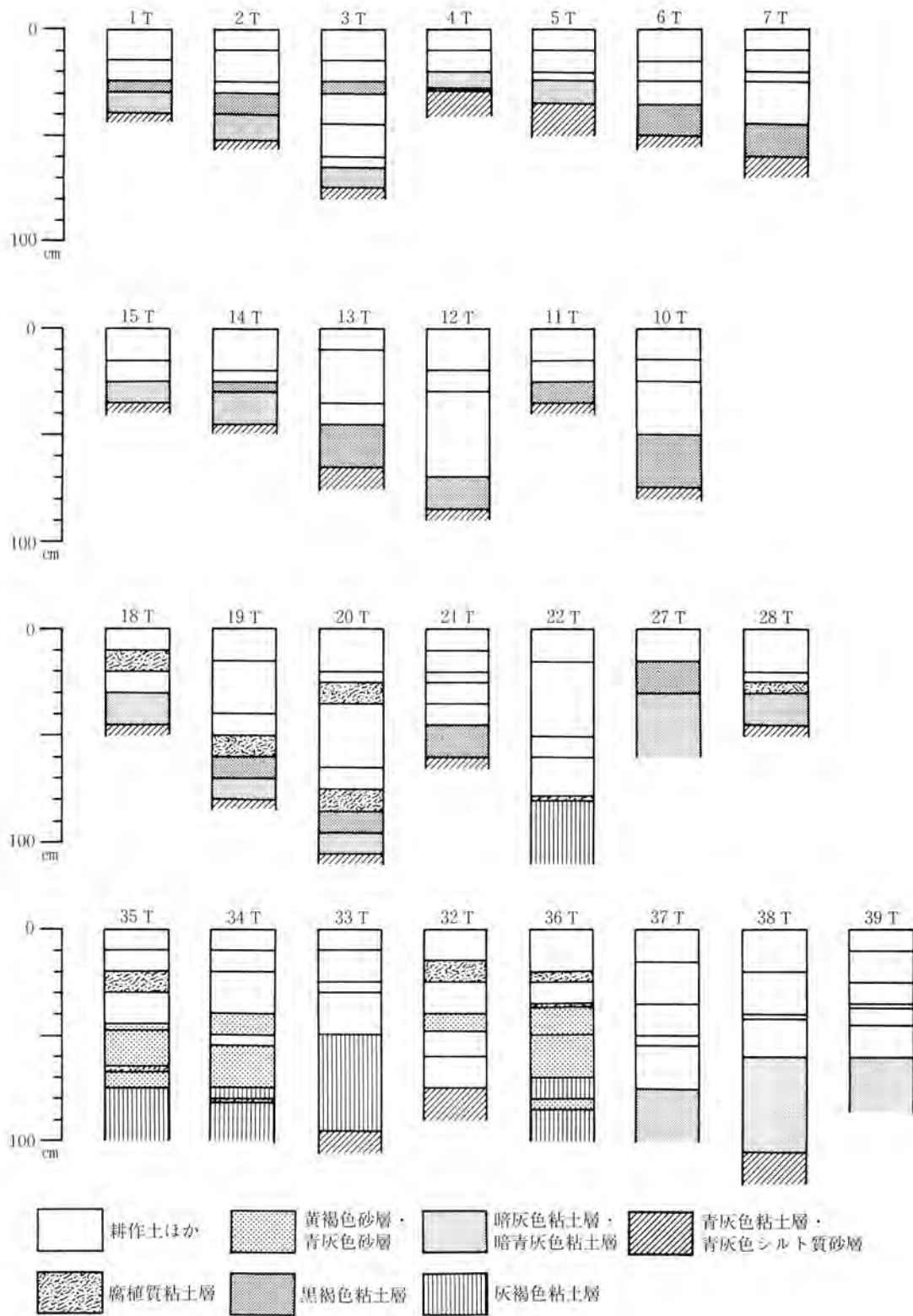
第4図に確認調査時の土層柱状図を示す。図幅の上段から下段へ北から南、左側が西、右側が東になるよう図示してある。海拔標高を出していないため、地表ラインを0mとした。基本層序は、耕作土の下に灰褐色粘土層・暗褐色腐植質粘土層などが堆積し、黒褐色粘土層・暗灰色粘土層、地山の青灰色粘土・シルト質破層に至る。このうち主要遺物包含層は黒褐色粘土層と暗灰色粘土層・暗青灰色粘土層である。包含層は1Tから5T付近では地表から20~40cm、南側の38T付近では60~100cmと、南東に行くほど深くなる傾向がある。層厚は10~35cmを測る。

遺跡範囲外の層序は一定でなく、腐植質粘土層や灰褐色粘土層等の堆積がみられた。また、32Tから36T付近では洪水堆積と思われる破層が厚く堆積していた。

2 遺構 (図版2・3)

確認調査時には、1T・2T・4T・5T・11T・14Tから溝・土坑・ピット状の遺構が検出された。また、いずれも地山の青灰色粘土層・青灰色シルト質破層を掘り込んで作られており、覆土は黒灰色粘土層である。本格調査時には上幅1m・下幅0.5mと調査幅が大変狭かったため、O52-1・3、O53-8・9で溝状遺構が検出するにとどまった。O列で検出された溝状遺構などは、県教育委員会が発掘調査した範囲で検出された遺構と関係があるものであろう。

その他に、S58-93・94、S58-97・98・99など遺物が多量に出土した地点は、発掘調査時には確認することができなかったが、比較的集中して遺物が出土していることも勘案すると、遺構に関連するものと思われる。



第4図 土層柱状図

3 遺物 (第5～8図、第1表)

出土遺物はコンテナで約20箱である。数点の中世の遺物を除く大半が奈良・平安時代の遺物である。遺物の種類は、須恵器・土師器のほかに銅製帯金具・砥石・鍛冶滓(鏡形滓)などがある。

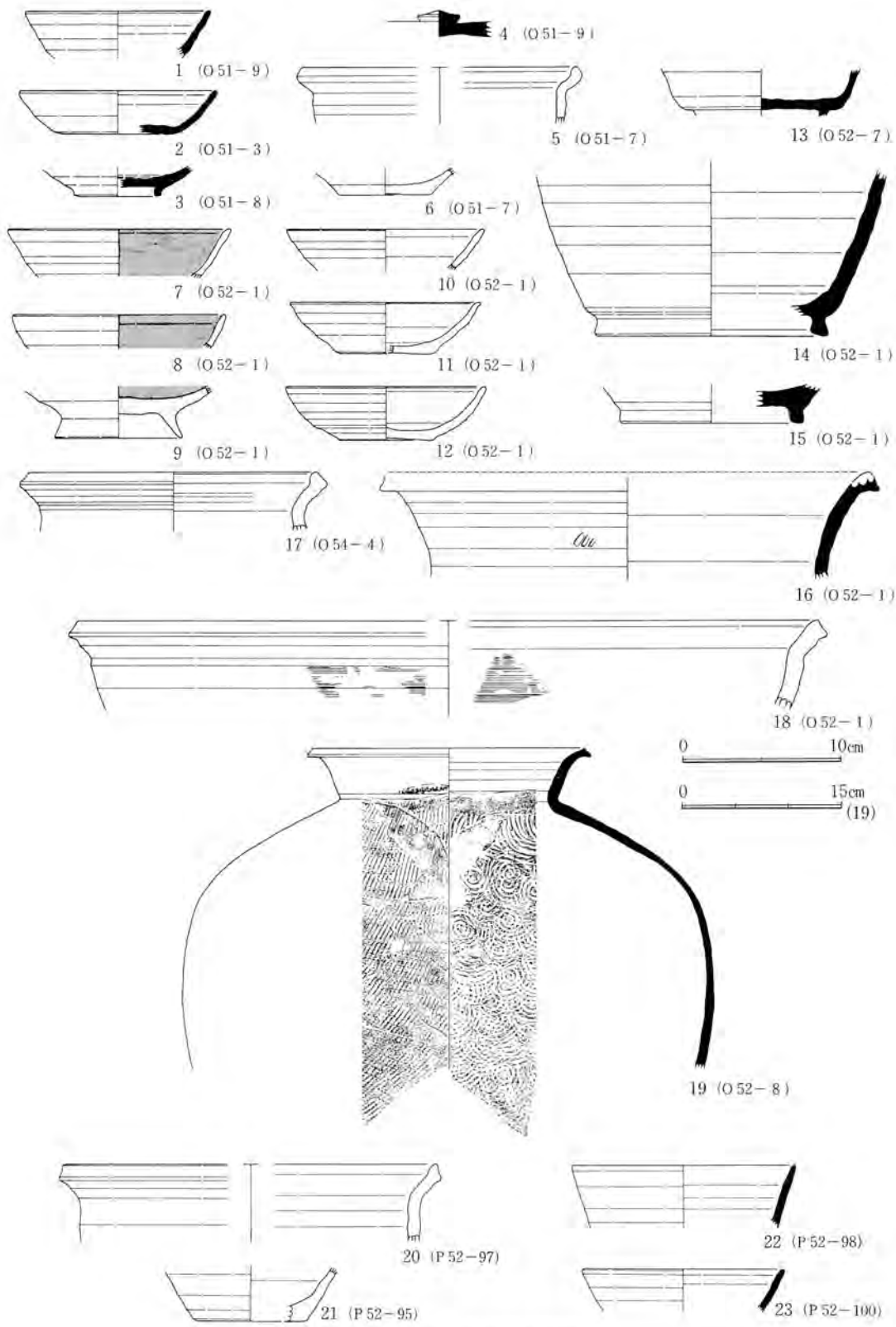
須恵器には、無台杯・有台杯・杯蓋・壺・甕・横瓶などの器種がある。無台杯は底部外面へラ切り無調整の佐渡小泊窯製品が多い。40の甕の肩部には杯を載せて焼成した痕跡が残る。土師器には、無台椀・有台椀・無台杯・長甕・小甕・鍋などの器種がある。一部を除き(31・33・39)、ロクロを使用したロクロ土師器である。無台椀・小甕の底部外面は糸切り無調整が一般的である。7～9は内面に黒色処理が施されている。これらの遺物は、一部に非ロクロ土師器など奈良時代の遺物を含むものの、9世紀中葉から10世紀前葉の遺物が主体と思われる。

遺物の分布状況を見ると、O51・O52グリッド付近とS58グリッドの2地点に集中が見られる。前者は県教育委員会発掘調査範囲の続きと考えられるが、後者は2地点間で遺物の出土が比較的希薄なことからみて、別の遺構・遺物の集中範囲が存在するのかもしれない。S58-97からは銅製帯金具(丸柄)が出土している(60)。外面と内面の一部に黒漆の痕跡(網点部分)が残る遺存状態の良好なもので注目される。

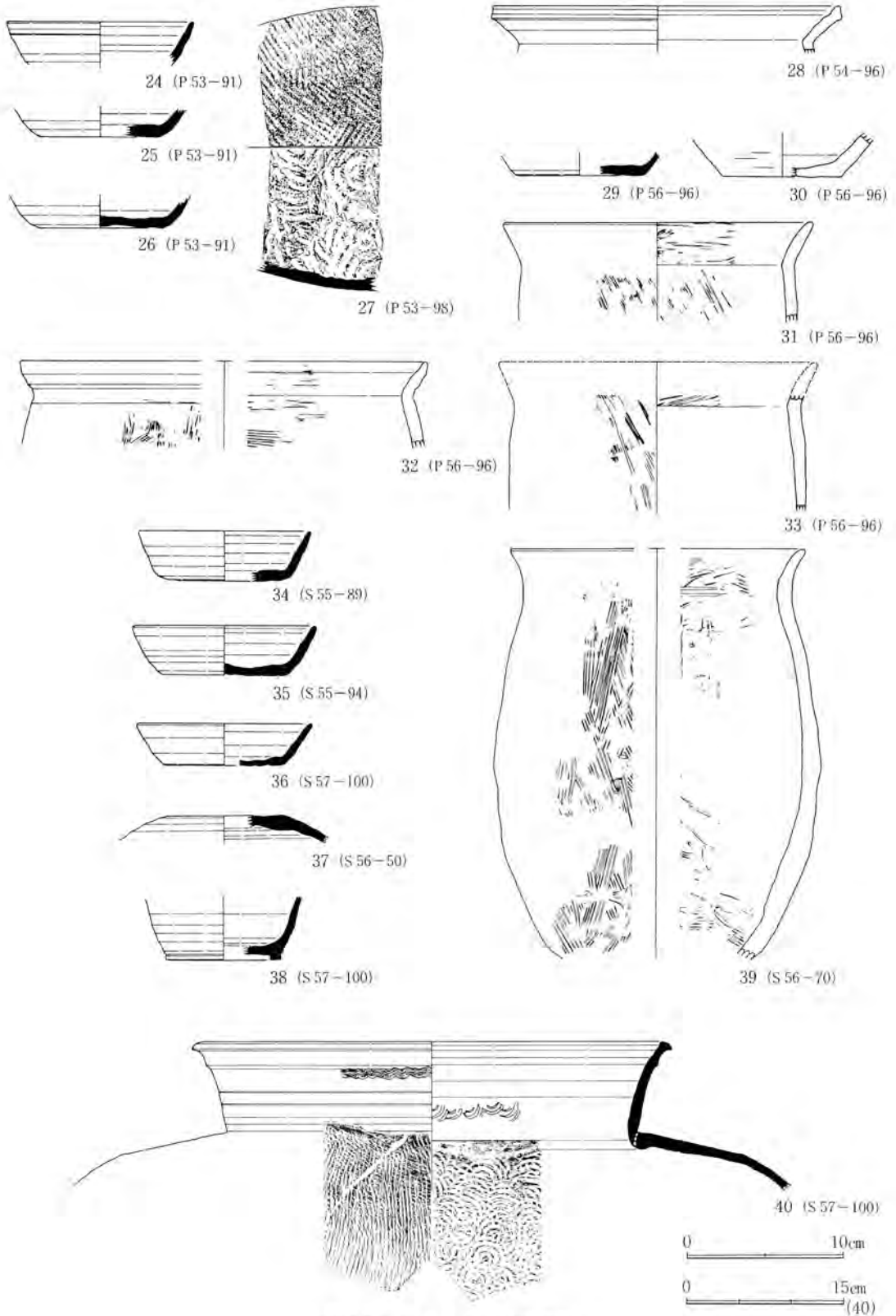
また、O51-3からは珠洲焼が1点出土した。磐越自動車道北側で珠洲焼の甕・揺鉢片、青磁片など中世の遺物が比較的多く採集されており(第8図)、より北側に中世遺跡の中心地点があるものと思われる。

グリッド	須恵器	土師器	その他	備考	グリッド	須恵器	土師器	その他	備考		
O50-10	3	4			P54-95	1	1				
O51-1		2			P54-96		31				
O51-2	1	8	珠洲焼1	1 T	P54-97		2				
O51-3	2	2			P54-98		3				
O51-5	1	8			P54-99		1				
O51-6	8	35			P55-91	3	23			11 T	
O51-7	7	51			P55-93		2				
O51-8	6	25			P55-94	1					
O51-9	12	110			P55-95		1	1			
O51-10	1	6			P55-96		2	2			
O52-1	7	48				遺構出土	P56-95	1	1		
O52-2	3	8					P56-95R		1		
O52-3	3	14	軽石1	P56-96	2		12				
O52-3・4	3	5		S55-89	1						
O52-5	1	6		S55-97	1				21 T		
O52-6		1		S56-50	1		1		24 T		
O52-7	1			S56-70			7				
O52-8	1	1	大甕1固体	S57-99	1		2				
O52-9	1	3		S57-100	6			大甕1固体	27 T		
O53-6		1			S58-91		1	1			
O54-1		5		4 T	S58-93	12	5		遺構出土 遺構出土		
O54-4	2				S58-94	19	30				
O54-6	1				S58-95		4				
P51-63		1			S58-96	1	16				
P52-92		2		14 T	S58-97	15	31	帯金具 1	遺構出土 遺構出土 遺構出土		
P52-95	1	9			S58-98	12	11				
P52-96		4			S58-99	13	19				
P52-97	2	6			T56-60	3					
P52-98	1	9					3				
P52-99	1	31	鍛冶滓1	13 T							
P52-100	2	3									
P53-91	7	9									
P53-93	1										
P53-93・94		2									
P53-98	1										

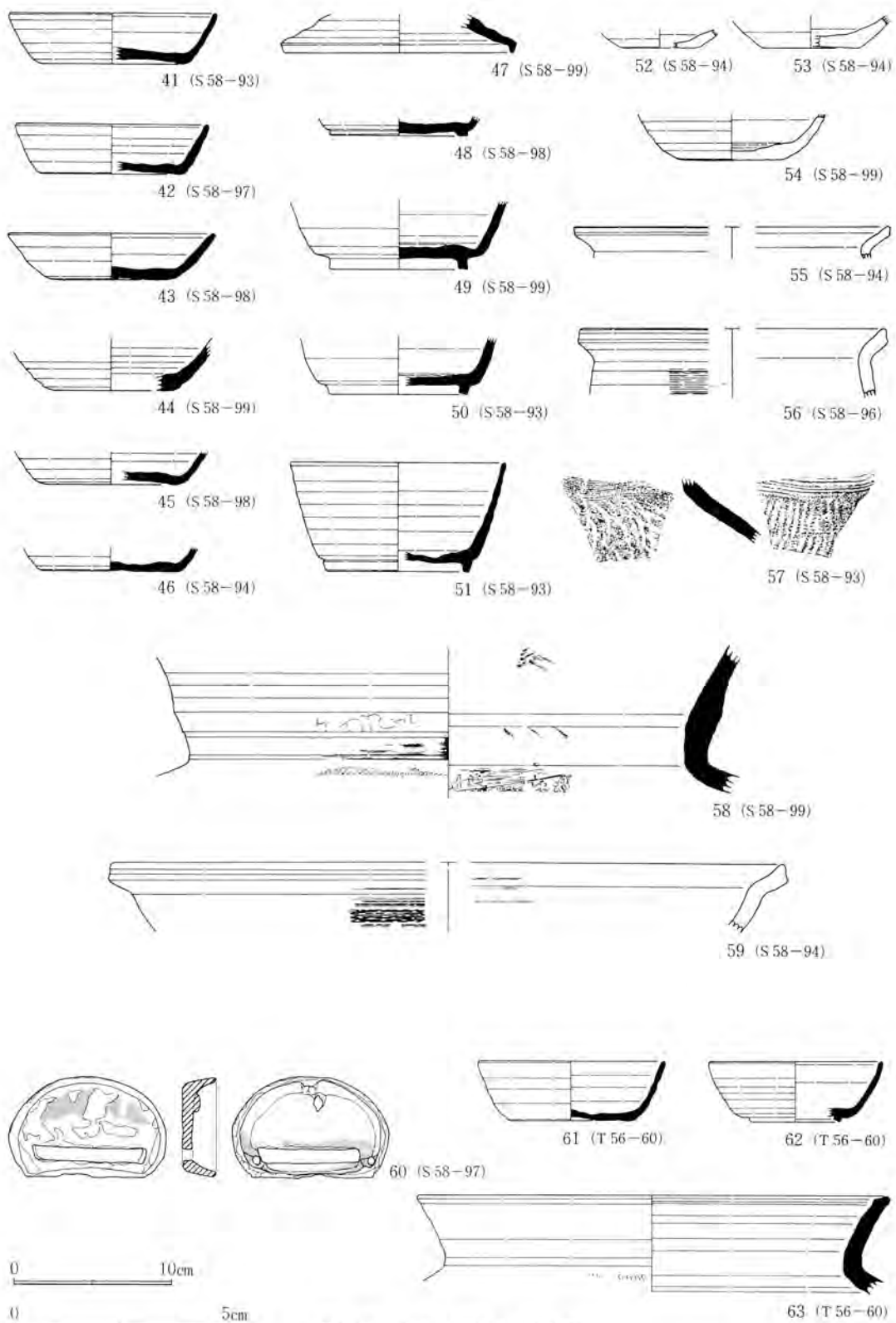
第1表 上浦遺跡出土遺物集計表



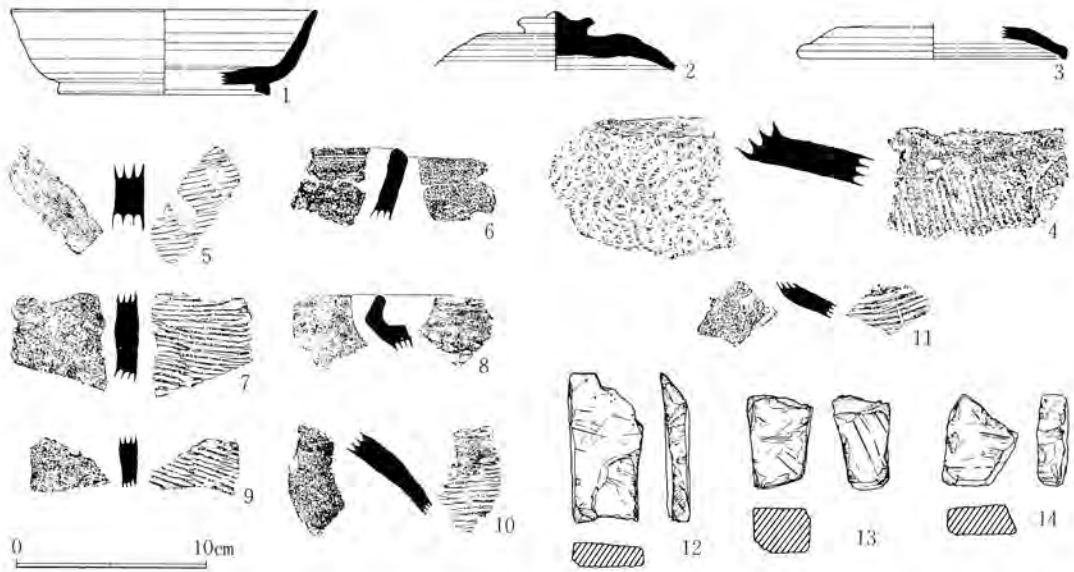
第5図 奈良・平安時代遺物



第6図 奈良・平安時代遺物



第7図 奈良・平安時代遺物



第8図 上浦遺跡表面採遺物

V ま と め

上浦遺跡は、須恵器や土師器の年代からみて主に9世紀中葉から10世紀前葉にかけて営まれた遺跡と思われる。今回の調査範囲の北側では8世紀初頭の遺物や中世の遺物が出土しており、時代によって中心地点が異なるものと思われる。磐越自動車道に隣接する地域で検出された溝状遺構は、県教育委員会が調査した範囲で確認された溝で区画した畠や水田に関係する遺構であろう。S58ゲリッド周辺では遺物が集中して出土し、また銅製帯金具も出土するなど居住域に関係する遺構が存在する可能性を残している。

発掘調査の結果、上浦遺跡は北東から南西方向に幅100～200m、長さ約1kmにわたって広がっていることが明らかとなった。遺跡範囲は、周知の遺跡範囲よりも南東方向に600m以上拡大することになった。南は北潟集落に、北は結遺跡や長沼遺跡につながる自然堤防が後背湿地などの微高地上に立地した遺跡の一つと考えられる。今回の発掘調査は、上幅1m・下幅0.5mと極めて限定された調査ではあったものの、遺跡の範囲を明らかにしたという点で、大きな成果があったと言えよう。前年度発掘調査した長沼遺跡や県教育委員会が磐越自動車道関連で発掘調査を行った沖ノ羽・寺道上・細池遺跡なども確認調査によって遺跡範囲が大きく拡大した。沖積平野に立地する遺跡は遺物包含層が比較的深いところに存在し、多くが水田に利用されているため、表面採集によって遺物がほとんど拾えない。沖積平野では、未周知の遺跡の発見および周知の遺跡の範囲確認につとめる必要性を痛感する。



遺跡遠景 (NW→SE)



遺跡近景 (W→E)



発掘調査風景



1 T 検出遺構



2 T 検出遺構



3 T 検出遺構



052-3 検出遺構



052-1 検出遺構



053-8・9 検出遺構



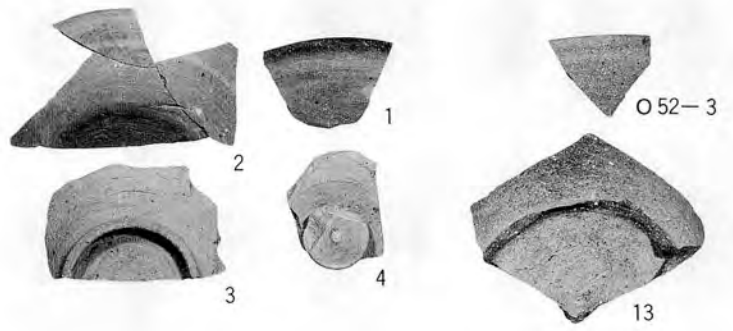
1 T 土层断面



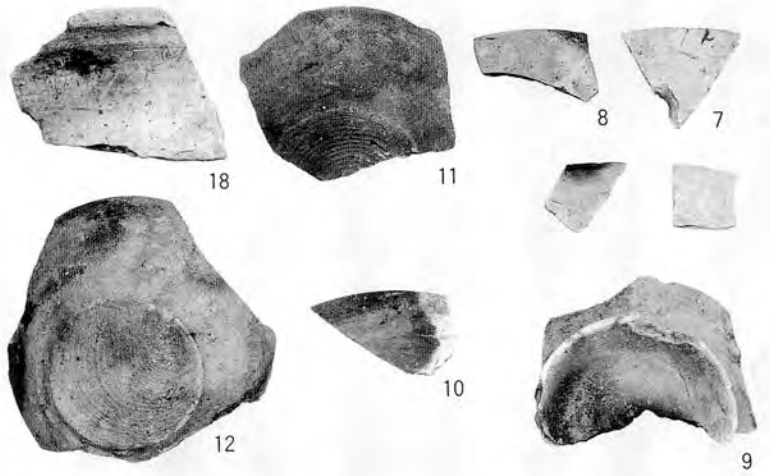
2 T 土层断面



27 T 土层断面



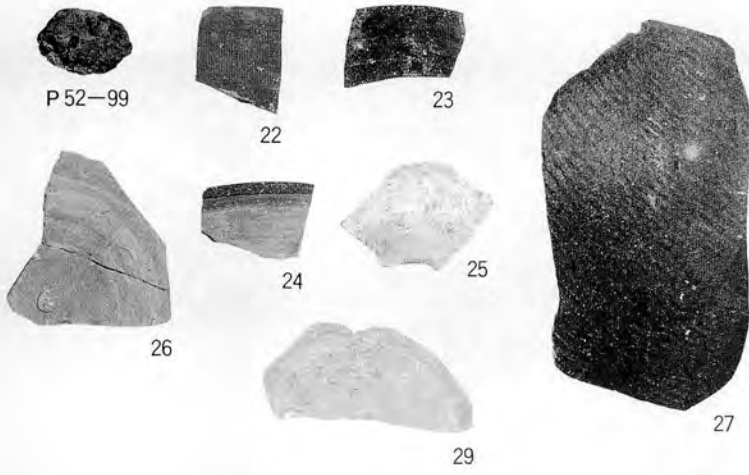
奈良・平安時代遺物
(須恵器)



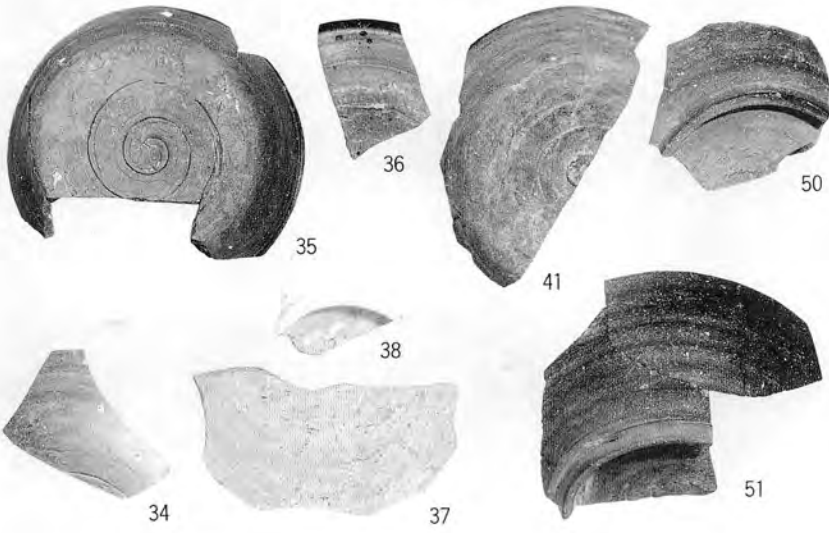
奈良・平安時代遺物
(土師器)



奈良・平安時代遺物
(須恵器)



奈良・平安時代遺物
(須恵器)



奈良・平安時代遺物
(須恵器)



奈良・平安時代遺物
(須恵器)



63

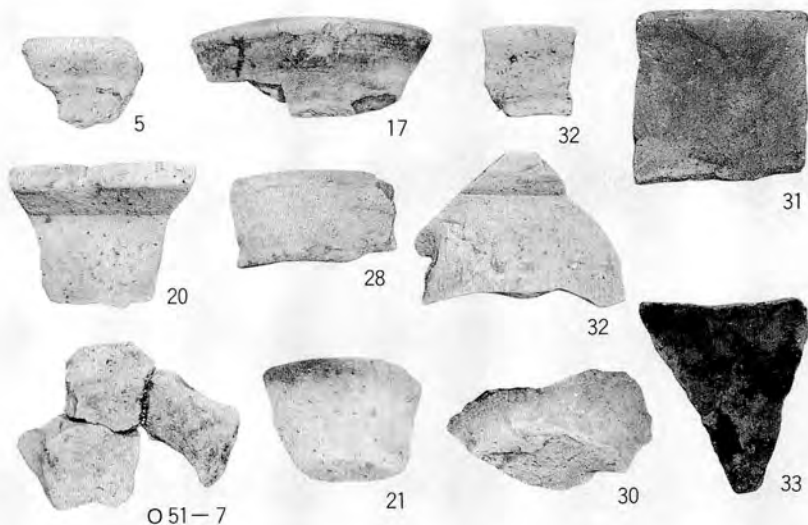
62



58

61

奈良・平安時代遺物
(須恵器)



5

17

32

31

20

28

32

O51-7

21

30

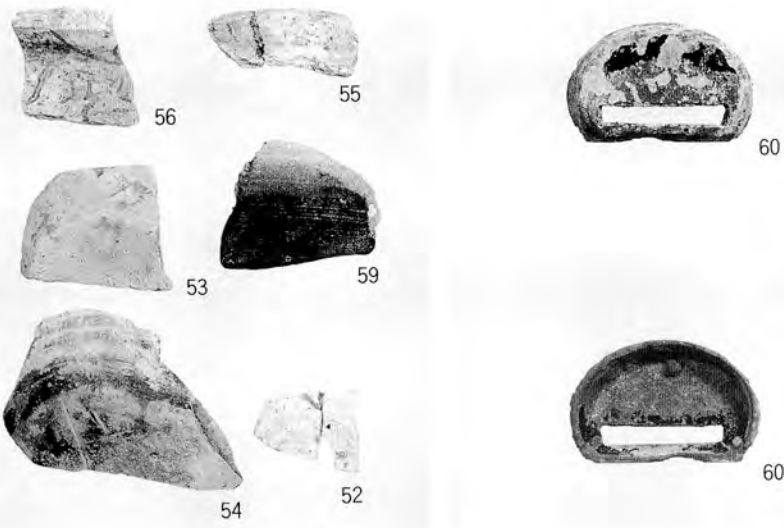
33

奈良・平安時代遺物
(土師器)



39

奈良・平安時代遺物
(土師器)



奈良・平安時代遺物
(土師器・帶金具)



19

奈良・平安時代遺物
(須恵器)



40

奈良・平安時代遺物
(須恵器)

引用・参考文献

- 北村亮 1991 「平成2年度の調査概要——上浦遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査だより』No.7
坂井秀弥ほか 1984 「上新バイパス関係遺跡発掘調査報告1」新潟県教育委員会
坂井秀弥ほか 1989 「新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀II遺跡」新潟県教育委員会
関雅之 1979 「新津市における考古遺跡と遺物について(1)」『新津郷土史』第3号
関雅之 1979 「新津市における考古遺跡と遺物について(2)」『新津郷土史』第6号
中川成夫・倉田芳郎 1956 「新津市田家七本松須恵器窯址発掘調査報告」『越佐研究』第11号
新潟県 1986 「新潟県史通史編1」
新津市史編さん委員会編集 1989 「新津市史資料編第1巻」新津市

発掘調査体制

- 調査主体 新津市教育委員会（教育長 川瀬毅夫）
総括 山口啓介（社会教育課長）、保科正旭（同課長補佐）
調査担当 渡邊朋和（社会教育課主事）
事務 窪田吉衛（社会教育課係長）、上沼茂（同主任）、丸山裕子（同主査）、阿達哲二（同技師）
調査作業 川瀬礼子、佐藤亮、志田ハルミ、田村金吾、土田早苗、鶴田須美子、山崎静、湯田キヨノ、和久井光治
協力 新潟県教育庁文化行政課、新潟県新津農地事務所、新津郷土地改良区、穴澤義功、北村亮、坂井秀弥、高橋保雄、田中耕作、渡邊ますみ、各地権者ほか

上浦遺跡発掘調査報告書

発行日 1992年3月30日

発行 新津市教育委員会
新潟県新津市程島2009番地
〒956 TEL (0250)22-9666

印刷 長谷川印刷
新潟県新潟市小針1丁目11-8
〒950-21 TEL (025)233-0321